

技術

正岡子規が俳句に詠んだ 明治29年の東京大水害

社団法人日本治山治水協会調査部長 渡邊 悟



1. はじめに

明治29(1896)年は我が国の災害史にもまれな大水害が発生した。No128とNo129の報告では、「明治の大水害と森林法の成立並びに治山事業の開始(治山事業100年を迎えて)」として明治29年当時の全国の気象観測体制、降水量、被害状況、更には森林法の成立や治山事業の開始を報告したが、今回は東京におけるその被害について正岡子規の俳句を紹介しつつ報告する。

明治29年当時東京に住んでいた正岡子規も、台風や洪水に遭遇し、「今年は全国大雨にて洪水ならぬ處もなき」と記している。

明治29年は全国的な水害年であったが、「関東でも荒川、江戸川、多摩川などが氾濫した。江戸川沿岸では、千葉、埼玉両岸とも2、3町村を除くほか全村ごとごとく浸水し、東京の本所、深川、日本橋、浅草等までほとんど床上を浸した。」(「農林水産省100年史」上巻 p.398)とある。

本報告では、明治29年当時の東京の降水量及び洪水被害状況などを主体に取りまとめた。

2. 東京都の明治29年大洪水

2.1 東京測候所の降水量

「東京災害史」(畑市次郎著 昭和27年5月20日発行)によると、明治29年の東京都の水害は、東京の明治三大水害の一つで、同43年の大水災に次ぐものである。

マリアナ群島からの台風が8月末から二度も来襲したため、東京も被害を受けた。利根川、荒川、多摩川その他の諸川がいずれも出水、ことに2回目の台風前後は8日が暴風雨、9日は雨、10日は大雨、11日、12日は暴風雨、15日、16日は大雨

表-1 東京測候所の明治29年8月降水量

(単位: mm)

8月	降水量
16日	—
17日	69.3
18日	0.5
19日	5.7
20日	—
28日	10.1
29日	—
30日	50.6
31日	2.0
上記小計	138.2
8月合計	152.7

出展:「明治29年中央気象台月報」

という有様であった。東京の降水量は表のとおりであった。

2.2 東京都の水害

「東京災害史」によれば、多摩川は9月8日正午から、増水、夜には平常より1丈5尺(4.5m)も高くなり、6郷村のうち八幡塚で58戸、蒲田の御園で100戸、中村で28戸が床上まで浸水したため、住民は立ち退きを迫られたが、翌9日には朝から減水し堤防の決壊もなくすんだ。

荒川は戸田橋辺りの水位が9日昼に平水より一丈二尺(3.6m)、10日午前5時には一丈七尺七寸

表-2 東京測候所の明治 29 年 9 月降水量

(単位：mm)

9 月	降水量
3 日	0.0
4 日	5.1
5 日	—
6 日	0.2
7 日	1.2
8 日	8.3
9 日	16.5
10 日	28.1
11 日	14.1
12 日	15.8
13 日	0.0
14 日	—
15 日	51.4
16 日	55.3
上記小計	196.0
9 月合計	208.4

出展：「明治 29 年中央気象台月報」

(5.4m)、11 日午前 5 時には二丈一尺三寸 (6.5m) に増水した。11 日には志村付近で 45 戸、岩淵町で 243 戸、王子町内で 231 戸、千住辺りで 136 戸、田畑 120 町歩が浸水して、本所区、浅草区の一部も浸水した。

利根川では権現堂川が増水して、12 日午前 5 時の権現堂村は水量一丈八尺五寸 (5.6m)、江戸川は 11 日午後 8 時に宝珠花で一丈六尺五寸 (5m) に達し、他の河川の堤防数ヶ所の危険が出た。そしてついに 12 日午前 11 時に、江戸川筋の三輪野江村の深井新田地先で堤防が決壊、埼玉県の庄内古川も同日午後 4 時 48 分に堤をきり、13 日午後 11 時には八木郷村の小向堤防がこわれた。このため中川は大増水して、15 日午前 1 時に新宿町で堤防 2 ヶ所、同日午後 5 時前後には、奥戸新田で塩入堤防が、また、東京への関門である花畑の

六ツ木入堰は、16 日午前零時にそれぞれ破れた。

隅田川の堤防から水があふれて、水は柳島方面へ押し寄せて、押上の堤を 2 尺 (0.6m) も越えた。押上 1 丁目から新小梅町方面は水浸しとなり、向島須崎から中ノ郷を経て押上までは浸水家屋が 1,333 戸、押上から柳島、大平町辺りは 1,924 戸、柳島本町から横川町は 136 戸浸水し、ところによっては床上 2 尺に達した。

この洪水では、本所を中心に浸水し、府と警視庁は救助に全力をあげた。本所区内で救助された人は 1,700 余人にのぼった。避難者は表町の明徳学校、須崎町の牛島学校、中ノ郷業平町の眞正寺などに収容され、炊出しをもらった。被害は特に区内北部で大きく、18 日夜水深 5 尺 (1.5m) に達し、最悪となった。浸水は 10 余日に及び、23 日から次第に減水し、27 日になってようやく水が引いたという。

2.3 正岡子規の俳句

明治 29 年当時正岡子規は東京に住んでおり、東京の台風被害と水害に遭遇し詠んだ俳句中には、次のようなものがある。

[正岡子規の俳句]

大水の引て雨なし秋の空
 大水のあとに取るべき綿もなし
 大水や屋根に栗干す野の小屋
 大水の刈田は海の如くなり
 秋立つとそよや嵐が吹いて来る
 魂棚の火を吹き消しぬ夕嵐
 窓の内に切籠をともし嵐かな
 嵐吹く芒の中や砧打つ
 淋しさや嵐のあとの秋の風
 夜嵐や風呂場倒れて花薄

銀杏の青葉吹き散る野分哉
 三日月の吹き取られたる野分哉
 路次口を出れば大路の野分哉
 鐘つけばほんとにきれたる野分哉
 大木の道に倒るゝ野分哉
 福山の城を残して野分哉

人がやがや土堀を起す野分哉
 堀こけて家あらはなる野分哉
 旅僧の吹き飛ばさるゝ野分哉
 小石やら雨やら野分顔を撲つ

黍動く野分の里に灯のともる
 ばさりばさり芭蕉野分に驚かず
 心細く野分のつる日暮かな
 この野分さらにやむべくもなかりけり
 野分して上野の鶯の庭に来る
 日の光野分の雲の暮れんとす
 野分の夜書読む心定まらず
 昼中や野分はじまる物の音
 草むらに落つる野分の鴉哉
 せんつばや野分のあとの花白し

都かな悲しき秋を大水見
 洪水多き年を二夜の月晴れたり
 柿喰ふて洪水の詩を草しけり
 などの 30 余の野分や洪水に関する俳句がある。
 また、正岡子規は、明治 29 年の台風や洪水に
 ついての周りの人々の騒ぎ立てる様子についての

記述も残しており、

「今年は全国大雨にて洪水ならぬ處もなきに今
 は輦轂の下さへ寝耳に水の騒ぎは向嶋一面海の
 如く牛の御前に避難所を構へてさながら戦時の
 有様なりと聞くより都下の老幼われ先に墨田堤
 に洪水見んと行くを中にも女だてらしかも紅粉
 白粉つけて出かけたる花なくて何の有様ぞと見
 し人の話しけるもうたてや」

と洪水の騒ぎを、本人は比較的冷静に記している。

2.4 東京都の水害被害額

明治 29 年の大水害は、中部地方が中心に広い
 範囲に及んだが、そのような中でも、東京、名古
 屋、大阪などの政治経済の中核が大きな被害を受
 けた。

東京都の水害被害は「日本帝国統計年鑑 17」(編
 集：内閣統計局 2001 年 4 月 25 日復刻版発行)
 によれば、表-3 のとおり、建物流損、流荒地、
 道路破損、堤防破損、波止場破損、橋架流損、川
 除流損、用悪水路破損により、損失価額 908,632
 円、再築費 191,492 円とあり、水災金額合計は
 1,100,124 円であった。

表-3 東京都の水害被害

地 方		東 京	全国総計
市及び町村大字		279	20,981
死亡したる者			1,250
負傷したる者			2,451
船 舶 流 失		—	3,680
建 物 流 損		9,774	729,613
流 荒 地 (町)		6,745	785,500
破損延長 (間)	道 路	10,644	5,050,017
	堤 防	6,853	2,487,844
	波 止 場		9,662
流損箇所	橋 梁	328	88,983
	川 除	280	96,043
	用悪水路	1,528	306,510
水災金額 (円)	損失価額	908,632	113,313,730
	再 築 費	191,492	24,381,072
	合 計	1,100,124	137,694,802

参考文献

- ・「農林水産省 100 年史」上巻 昭和 54 年 3 月 25 日発行 編纂「農林水産省百年史」編纂委員会 p. 398
- ・「明治 29 年中央気象台年報」第壹編 全国気象表、参照：図 1 測候所一覽圖 気象庁 国立国会図書館蔵
- ・「明治 29 年中央気象台月報」中央気象台 国立国会図書館蔵
- ・「日本帝国統計年鑑 17」編集：内閣統計局 2001 年 4 月 25 日復刻版発行 復刻原本：総務省統計図書館蔵
- ・「東京災害史」畑市次郎著 昭和 27 年 5 月 20 日発行 都政通信社
- ・土木学会図書館 旧蔵写真館 写真